

「幸せを感じた夏」

広島なぎさ中学校3年 原 知菜美

「それではみなさん体調に気を付けて楽しい夏休みを過ごしてください。」と終業式の校長先生の言葉。しかし、その時私は激しい腹痛に襲われていた。その日の学校での三時間は、まるで一年の月日のように長く感じられた。その後ダンゴムシのように丸まって早退した。夏休み初日、運ばれた病院で腹膜炎と診断され緊急手術が必要と言われた。生まれて初めての手術、しかしその時私は怖さ・不安よりも二日後に控えたバスケットボール部最後の大会の方が気にかかっていた。今まで二年と二ヵ月、週に六回の厳しい練習を共に頑張ってきたチームメイトの顔が浮んだ。

「引退試合で一緒に戦うことが出来ないんだ・・・。」涙が止まらなかった。今まで頑張ってきたバスケットボール。生活の一部になっていたバスケットボール。「大切なものは失ってから気づく」とはまさにこのことをいうのかとしみじみと感じた。練習が辛くて何度も辞めたいと思った。でも励まし合うチームメイト、だんだん上達する自分。いつの間にか私はバスケットボールが大好きになっていたが、ここまで自分にとって大切なものだとは思っていなかった。

手術後まるで自分の体ではないように歩くのも、起き上がることさえも辛かった。今まで人一倍元気だったからこそ思い通りにいかないという衝撃は大きかった。

次の日メールを見ると沢山の人から「大丈夫?」「早く元気になってね!」というメッセージが届いていた。私の目は再び涙でいっぱいになり画面がぼやけた。そしてチームメイトや先輩から電話ももらった。ただでさえ部員が少なく一人抜けると大変なのにも関わらず、みんな私の体のことを気遣ってくれ「知菜美の分まで頑張るね!」と言ってくれた。

腹膜炎になる少し前、私はお母さんと喧嘩をした。原因は何だったのかすら覚えていない。色々注意されるのが嫌でウザイと思った。もう独りになりたいと思った。しかし、あの腹痛。自分の中で何が起きているのか分からない不安と恐怖。その時一緒にいて心配し、励まし、看病してくれたのは家族だった。最初は腹痛の原因が分からず、お母さんは病院を三軒も回ってくれ入院した時は病室に泊まり世話をしてくれた。面白いことを言って笑わせるのでお腹の傷が痛かったけれど。

腹膜炎という病気を通して、この夏私は多くのことを学んだように思う。まず何といっても健康のありがたさだ。「早寝早起きをしろ。」「野菜を食べろ。」とうるさいお母さんの口癖がちょっとだけ身に沁みた。そして家族・友達の大切さだ。自分のこと以上に心配してくれる言葉や励ましに、その存在の大きさを強く感じた。

引退試合に出ることが出来なかったのは未だに悔しいけれど、その代わりにかけがえのない幸せを噛みしめることができた。